日本
ハンザキ研究所ニュース 2012(2)：通巻 No.74

発行２０１２年２月２９日
〒６７９－３３４１兵庫県朝来市生野町黒川２９２
Tel／Fax:０７９－６７９－２９３９
E-mail：info@hanzaki.net
URL：http://www.hanzaki.net
NPO 法人　日本ハンザキ研究所　栃本 武良

九州のハンザキ

岐阜以西の本州と四国、大分県に生息すると言われているハンザキだが、四国は自然分布ではないと言われることが多い。九州のハンザキが大分県の駅館川（やっかんがわ）の上流の岡川にしかいないとされているのもなんとなく変な気がする。その岡川の生息密度はかなり高そうである。10 年ほど前に大分の佐藤真一先生に案内していただき岡川を歩いた時には 100 ㍍ほどで 10 個体を確認できた。それも全長が 40～50 ㌢という小型個体ばかりであったのが印象に残っている。この川の上流にはハンザキを祭る祠があって隣村の住民が守っているそうである。地元の住民ではないのに不思議な話である。佐藤先生にそのいわれを調べてくださいとお願いしたが、話のついでに福岡県の赤村にもハンザキの祠（写真１）があるということを教えていただいたが、昔から生息していたのではないかと思う。

大分県宇佐市院内の岡川上流の祠（佐藤真一先生撮影）

当ニュース№52 の表紙のハンザキの焼き物は熊本県の工房で作られたもので、作者は昔から熊本にハンザキが住んでいるので、その姿を焼き物にしたと言われた。1978 年の当時の環境庁の報告では、九州からは大分 1 件・福岡５件・宮崎４件・熊本５件の４県で確認されているが、件数は少ないが大分の１つの河川では多産することが知られている。図鑑などで九州北部とか大分県などと記載されているが、誰がきちんと調べたのであろうか？２か所の祠の建設年代は分からないが、自然に生息していたような感じがしてくる話である。赤村を流れる十津川にはハジカミ（オオサンショウウオの方言）淵と名付けられた場所があって、そこからもハンザキが見つかっているそうである。赤村の祠のご神体はハンザキそっくりの石が祭られている（写真２）。四国がハンザキの棲息域から外されている図

鑑などが多い。四国４県からの確認報告はあるが、きちんとした調査がなされていなかったのが原因だろう。日本動物園水族館協会の中国四国ブロック園館長会議で、四国の皆さんに頑張ってくださいと提案したことがあった。その結果、高知県から幼生発見の朗報があったのは何年前になるだろうか。数少ない調査で幼生が発見されると言うことは、かなりの棲息が期待される。夜行性の水中生活者の調査は、やはり夜の川に入って調査をしなくてはならないと言うことだ。

文献でも、古くは高千穂宣麿（1916）“ハンザキ九州に産す”や田子勝弥（1925）の“九州にも大山椒魚（ハンザキ）棲息す”に始まり、福岡県を中心に多くのハンザキ報告を残している祝原道衛（1959～1990 の報告）などがある。中でも祝原さんは赤村のハジカミ淵付近には多産したと記述されている。祠があったり、多産と言う記述があるのだから福岡県・熊本県・宮崎県でハンザキに関心のある方々に大いに期待したいと思う。

“ふるさと赤村に伝わる伝説・昔話・伝統芸能・・・紹介”には「日照りが続いて水に困ると、村人たちは降雨祈願のため馬屋肥（馬小屋に敷いてあった糞尿のしみこんだワラ）をハジカミ淵に投げ込む。すると、淵の主である大ハジカミが怒って雲を呼び土砂降りにした」という伝説が残っているそうです。清流を汚すことは今でもいけないことですが、現代のハンザキたちはどんなに怒っていることでしょうか？　世界に誇ることのできるハンザキたちの聖地を守ってやりたいものだと思います。

（大分の佐藤真一先生、赤村役場産業建設課井上さん資料有難うございました）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

カモガワ・ハンザキの食欲

京都市が文化庁の補助を受けて賀茂川のハイブリッドの実情調査に踏み切り、100 個体を捕獲し私どもの施設に収容した。前からの分を含めて 159 個体を飼育していることになる。これまでは適当に餌を放り込んでいたが、実際にはどの位の餌を与えればいいのか不明のままである。昨年末に全個体の測定が出来た所で総体重は 600 ㌔である。24 時間泳ぎ回っている鯨類では１日に体重の 10%の餌を与えるという。ハンザキ類の餌量についての報告はほとんど無いが、姫路市立水族館における実験では１日に体重の 0.3～0.9%の摂餌量（アジ肉）で８か月間に全長が＋49 ㍉という良い成長を示した例がある。集団での飼育実験ではないので参考にならないが、今回は 0.5%（30 ㌔）で観察をしてみようと考えた。

しかし、アマゴの養魚場から生きているアマゴをそれだけ与えると８万円を超えるので経費が掛かり過ぎますので、アジを与えることにしました。昨年の 12 月から月に１回ですが 30 ㌔のアジを投入しましたが一晩で完食でした。水温が１～５℃という時期にもかかわらず凄い食欲で、これから水温が上がっていくともっと食うのではないかと考えています。このペースで様子を見つつ、時々生きているアマゴも与えつつ餌量を増やしていき、体重の変化を見ていこうと思っています。生きている魚の場合にはどれくらい食ったのか分かりませんので、最終的な投入量を加えて考えて見たいと思います。

鳥取県立賀露かにっこ館

鳥取県といえば“マツバガニ（ズワイガニ）”の産地です。鳥取港の一角に農水産物を観光客相手に安く売る市場“かろいち”に無料のカニの水族館があり、年間 19 万人の見学者があり多くのイベントを実施している。実は、15 年ほど前にカニ博士である国立科学博物館の武田正倫さんが委員長で世界中のカニを集めての博物館を建設する計画がありました。私もたまたま姫路市立水族館に来られた武田さんが都立国立高校の 1 年後輩であったことから、このカニ博委員会に誘われて参加していました。しかし、県知事が交代してからは規模が縮小されて建設されることになったので、平成 15 年に開館してからまだ見学したことが無かったのです。

規模が小さくなったということで、どんなものかと思って行ったのですが中々ユニークな展示工夫がなされており、教育活動にも力が入っているとのことでした。世界最大のカニである日本特産のタカアシガニ（写真 3）や甲羅が世界最大というオーストラリアのオオガニ（写真 4）の展示が有ります。カニ・グッズは私のハンザキ・グッズに負けない沢山の展示（写真 5）がありました。タッチ・プールもあり子供たちのための手作りの防水上着がたくさん用意（写真 6）されていたのに感心しました。姫路市立水族館でも濡れた T シャツを干している光景を再々見かけていたからです。カニではありませんが、特大のマダコの水槽の前にはカニやエビの模型が置いてありそれをガラスに付けるとタコが腕（足？）を伸ばしてくるのです。また、“ブリっ子”の展示は初めて見ることができました。海藻に産み付けられたハタハタの卵塊（写真 7）のことです。

・・

鳥取県のハンザキ

念願の鳥取県立博物館に展示されている重量記録 44 ｷﾛ（全長 143 ｾﾝﾁ）のハンザキ標本を見てきました。全長最長記録は 150.5 ｾﾝﾁ（広島市安佐動物公園標本）で体重は 27 ｷﾛであるからその重さが分かるメタボな標本（写真 8）である。この個体は、私が島根県立宍道湖自然館の館長を兼務していた時に、鳥取県日野郡日南町で死亡したものだ。標本をくれるということですぐに連絡したが、発送直前に鳥取県立博物館に鳥取県産だからと引き取られたという因縁の物である。

今回の鳥取県行はかにっこ館見学やメタボ標本の視察は付録で、本命は個人宅で飼育されていたハンザキの引取りである。岡山県奥津町のダム建設現場から入手したハンザキの収容を鳥取県から依頼されたからである。飼育していた老人が死亡してしまい、可愛がっていた夫人が最大個体（全長 125 ｾﾝﾁ）を殺してしまったので飼育を諦めて博物館に相談したそうである。無論、個人で飼育することは出来ないことだが、千代川に放り込まれたらそれまでであり、きちんと連絡して処置をすることを考えてくれたのは幸いであった。日南町の個体も個人飼育の物で、脂分の多いアジなどを与えていたことがメタボに繋がったと考えられる。今回、緊急保護した 3 個体と 1 死体（写真 12）は啓発などに使う予定だ。

井伏鱒二の山椒魚

「山椒魚は悲しんだ」の書き出しで知られる短編である。無論、水中生活で大きくなり過ぎて洞穴から出られなくなったという所からもハンザキのことであることが分かる。井伏（本名は「いぶし」）家は広島県福山市に鱒二（本名は満寿二）生家として残されている。御当主は兄の息子つまり甥に当たる方で鱒二そっくりの体格の人であった。叔父さんはハンザキの生態をよくご存知だったのですねと聞くと「いや、何も知らなかったはずです」とのお答えだった。しかし、ハンザキにとっては昼間の隠れ家と夜間の餌の狩場が近ければ近いほど理想的なのである。よく質問されることであるが「ハンザキは一晩にどのくらい動くのですか？」と聞かれるが、それは条件次第で色々であると答えている。人間でも通勤時間が２時間をオーバーするとしんどいので転居を考えるのと同じで、定住性の強いハンザキもどのくらいを限度に考えているのか知られていないが、時々移住する個体がある。井伏の山椒魚は究極の良い条件の住まい、つまり通勤しなくとも餌を取ることができる巣穴であったということだ。本当にハンザキの生態を知らなかったのだろうか？

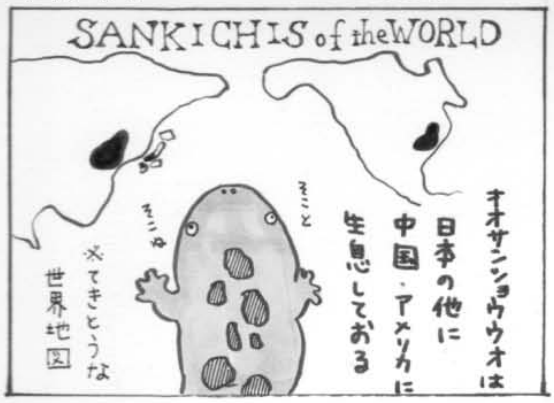
当ニュース№72 に喜田先生のことを紹介した。先生がウイスキーを送ってくれるについて井伏鱒二訳の「勧酒」（晩唐の詩人・干武陵の詩）を書き写して添えてくださった。後日先生の座右の書として幻冬舎新書・木谷恭介著「死にたい老人」に出ている部分のコピーをいただいた。人間は「生き様」と共に「死に様」も大切なことと先生は考えておられるからなのだろう。

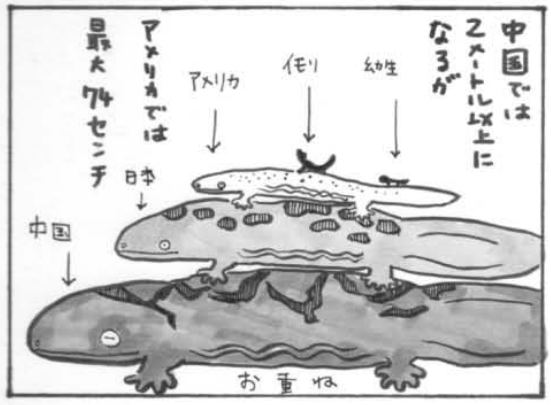
勧君金屈巵（君に勧むきんくつし）満酌不須辞（満酌辞するをもちいず）
花発多風雨（花開けば風雨多し）　人生足別離（人生別離足る）
この漢詩を鱒二は以下のように訳している。
コノサカヅキヲ受ケテクレ　　ドウゾナミナミトツガシテオクレ
ハナニアラシノタトエモアルゾ　　「サヨナラ」ダケガ人生ダ

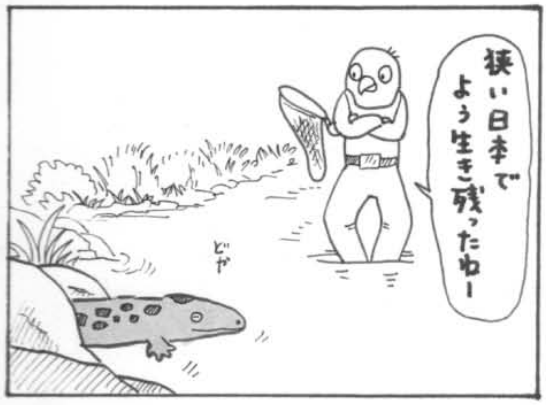
「金屈巵」とは、把手のついたおおきな盃のことらしいが、漢文をよみくだすのではムードは感じ取れるものの意味を読み取ることはむずかしい。日本の僧に井伏鱒二のような心構えがあれば、1600 年の間にお経の名訳が次々とでてきていたにちがいない。日本語で読め、日本人の誰もが理解できるお経。それがあったら、日本の仏教は変わっていたのではないか。と木谷さんは書き綴っている。

井伏鱒二は、自分の作品に後日手を入れる改稿癖が強いと言われている。この山椒魚も最後の部分を 16 行もカットしたことで有名である。丸々２年間の岩屋暮らしで出ることができなくなるほど成長したということになるが、そんなに餌が豊富にやってきてくれたのだろうか？もっとも我がアンコ淵の黒主君は穴の入り口一杯の頭であり、入る時の様子は尾を振って必死に入っていくように見える。出られなくなるか入れなくなるのか・・・

その3 分布



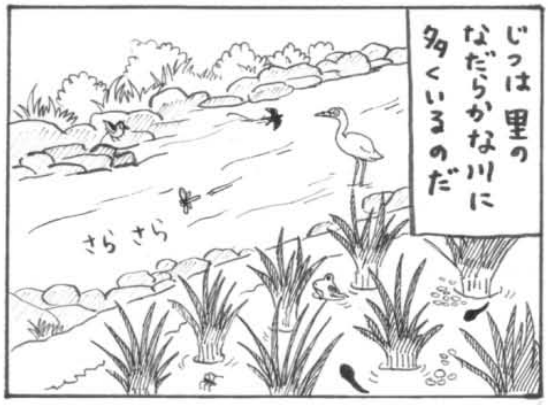




サン吉：オオサンショウウオ
川にすむ王さまである

トリ子：トリ型宇宙人
地球を征服するべく先吉の
生命力をさぐっている

その4 分布



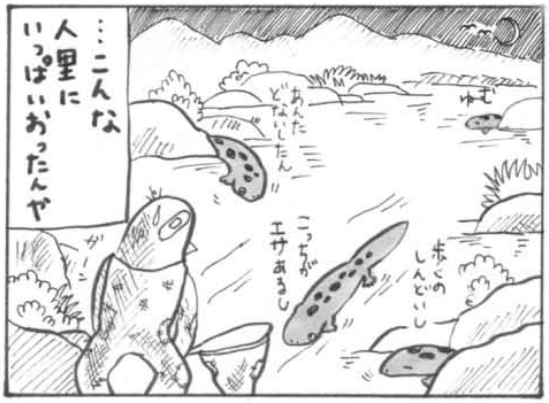


写真 1　福岡県赤村の祠（佐藤先生撮影）

写真 2　赤村のご神体（佐藤先生撮影）

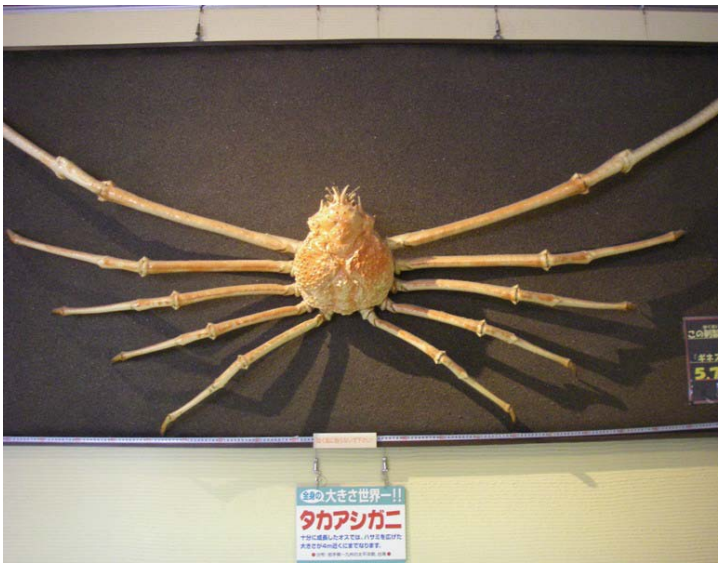


写真 3　タカアシガニ（世界最大のカニ）

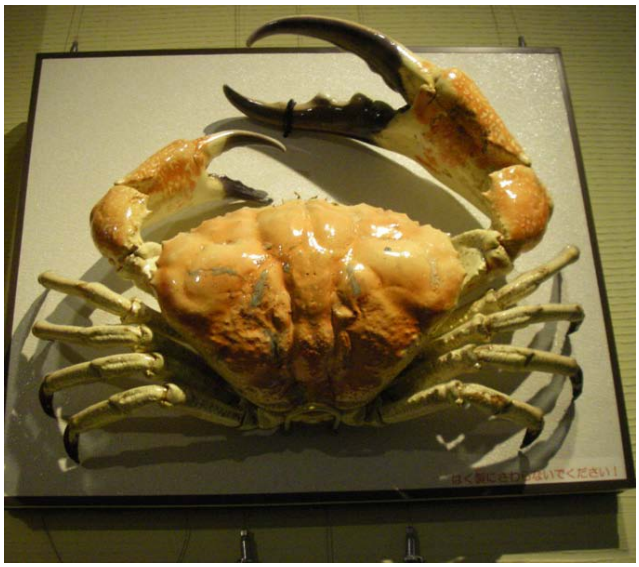


写真 4　　オーストラリアオオガニ（最重量 13.6 ㌔）

写真 5　カニ・グッズ

写真 6　防水上着

写真 7　ブリっ子

写真 8　最重量記録のハンザキ

写真 9　セグロセキレイ？の飛び立ち痕

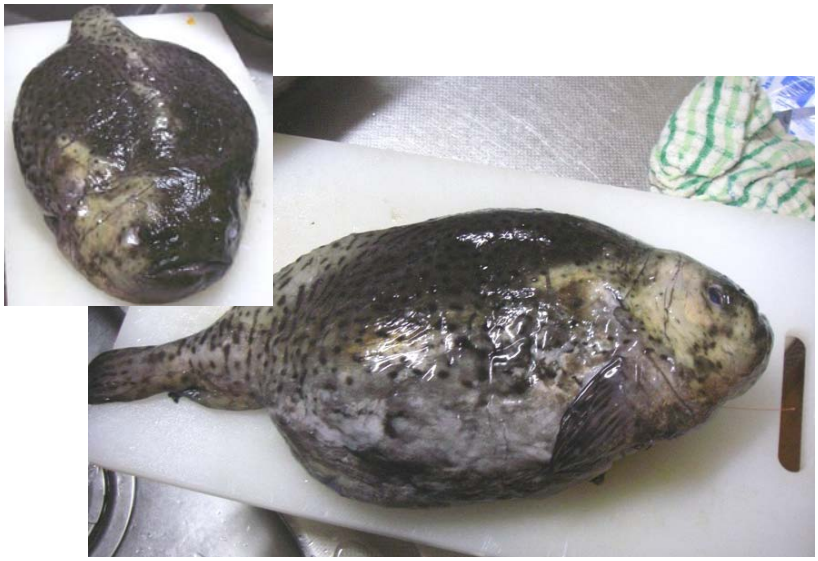


写真 10　　珍魚ガッコは旨かった

写真 11　鳥取のハンザキ測定中

写真 12　全長 125 ㌢の標本展示

ハンザキ研日誌　　　　２０１２年２月

１日　カブトガニ研究者の関口晃一筑波大学名誉教授死去（92 歳）
３日　雪掻き⑥
５日　神姫バスで下山
６日　・兵庫県文化財保護審議会、県公館にて
　　　・さんちか古書大即売会で古書購入
７日　・ビールと共に配送、帰所
　　　・爬虫類両生類研究者の“千石先生”こと千石正一氏死去（62 歳）
８日　リバーフロント整備センターより円山川水系自然再生推進委員会・技術部会の事前ヒヤリングに来所（２月 16 日の会議欠席のため）
９日　ハンザキ研ニュース№72（2011 年 12 月号）刊行
１１日　・事務局会議 9 名出席
１２日　・午後、事務局の新年会？ボタン鍋 10 名参加
　　　・便座の水鉄砲が凍結
１４日　デマンド・バスで下山
１５日　内科診察他資材調達
１６日　外来種チュウゴクオオサンショウウオ対策検討会（京都市勧業会館にて）
１７日　ビール配送・帰所途中で銀山湖上空にアトリ？の大群観察
１８日　雪掻き⑦
１９日　浴槽と給湯器をつなぐホースが外れる、色々なことが起こります
２０日　上水の殺菌用の次亜塩素点滴タンクが凍結していた
２３日　カモガワ・ハンザキにマアジ 30 ㌔投餌、一晩でペロリ
２８日　・鳥取県下の個人飼育中のハンザキ３個体をチェックに出張
　　　・鳥取県立賀露かにっこ館視察（かに博物館建設委員であったが、構想が縮小されて、初めての視察）
　　　・鳥取県立博物館視察、最重量記録のハンザキ標本見学（写真 8、全長 143 ㌢、体重 44 ㌔、ちなみに最大標本は広島市安佐動物公園の 150.5 ㌢ 27 キロです）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ハンザキ所長のツブヤ記録

今年は積雪が多い。長靴が埋まりそうな深さ以上で７回目の雪掻きをした。300 ㍍に及ぶ長い距離の雪掻きでは腰が痛むし大汗をかいてしまう。おまけに、前の雪が完全に溶けずに凍っているので作業がはかどらない。山の北側に位置しているオオサンショウウオ保護センターの作業場の屋根は落雪防止具を付けたので、再々の降雪によって重量が増えていくので支えの単管がしなっている。なかなか厳しい冬だ。